海外ボランティア活動報告

09-011-079　木村明日美

１、活動について

①期間…７月１２日～２５日

②NGO…「国際協力 NGO　ボランティア・プラットフォーム」の活動受け入れ先孤児院

③行き先…西アフリカ・ガーナ　クマシ市　コロンブス孤児院

④費用…参加費 99,800 円

飛行機 248,000 円

保険 3,000 円

黄熱病等予防接種 15,000 円

ビザ 9,440 円

その他 50,000 円　　計 425,240 円

⑤主な活動…孤児院の子供たちとの交流、隣接している学校での給食などの食器洗い、破れた服の修理等

⑥参加理由…去年は初の海外渡航で一人でフィリピンに行き、スラムにホームステイさせていただき、子供たちにフィーディングなどの活動をしました。私が活動を終えた後、ボランティアに行く際利用させていただいた「ボランティア・プラットフォーム」の受け入れ先に、新しくガーナの項目ができていました。私はアフリカにずっと憧れていたので、来年はガーナに行こうと冬になるころには決めていました。そして今年 3 月、大地震が起きました。それ以降私は、今年の夏はガーナに行く、ということを人に話すのを躊躇するようになりました。それは、ある人に「なぜ日本が大変な時にわざわざ海外に行くの？大金を出さなくても、助けを求めている人は近くにいるのに」と言われたからでした。確かに、と思わずにはいられなかったのです。『私が、近くで助けを求めてる人を差し置いて海外に行くのは何故？』『結局、ボランティアとか関係なく、ただアフリカに行きたいだけなんでしょ？』『ボランティアっていう名目のほうがただの旅行っていうより良く見られるからなんじゃないの？』そんな疑問がどんどん浮いてきて、答えを見つけることはできませんでした。長い葛藤の末、『なんと言われてもいい、私は私のやりたいことをやる。』という気持ちになって、ガーナに行くことを決めました。去年の経験があったので、親も去年よりはすんなり受け入れてくれて、資金の協力もしてくれました。

２、感想

日本から飛行機で 11 時間かけてトルコに行き、そこからさらに 6 時間。ガーナについたのは夜 10 時過ぎで、空港のあるアクラからバスで 6 時間北に向かい、クマシという大きな都市についたのは翌朝でした。受け入れ先の孤児院もクマシ内にありますが、クマシはとても大きいので、バスターミナルからタクシーでさらに 3 時間かけて孤児院に行きました。因みにガーナまでは一人で行き、現地の仲介人のような立場の方と、インターンとして現地で NGO の手伝いをしている他大学の日本人の女の子が空港まで迎えに来てくれました。

アフリカの土を踏んだだけで、世界観が随分と変わりました。地面を何かがすごい速さで動いて

いるのが見えたからです。それは、日本では想像もつかないような大きなトカゲでした。ああ、自分の常識が通用しない、異国の土地に来たんだなぁ、と改めて思いました。土は赤茶色で、周りの人々はみんな黒人で、頭に何かを乗せて歩いている人ばかり。絵にかいたような、想像通りのアフリカにいることに感動しました。

孤児院に行く前に、仲介人の方々の事務所で現地の風習や交通機関、言葉などのオリエンテーションを受けさせてもらいました。ガーナは公用語は英語ながら、高齢者や未就学児は現地語のチュイ語を話します。オリエンテーションは英語でしたが、私は自分の英語力の低さに落胆しました。30 分も話を聞いていると集中力が切れて、何を言っているのかわからなくなってしまうのです。聞きそびれたところはインターンの女の子に聞きつつ、現地語を覚えようと努力しました。現地の人に現地語で話しかけると、とても興味を持ってくれますし、嬉しそうにしてくれるからです。オリエンテーションでは、孤児院についた後のことも説明を受けました。去年のガーナでは、やることの選択肢があり、マスターが予定を立ててくれました。しかし孤児院では、誰も何かをやれとは言わないし、自分のやりたいこと・できることをやるように、と言われました。それからはずっと、自分に何ができるのかを考えていました。

孤児院に着いて自己紹介をすると、私の部屋を案内してくださいました。日本人のボランティアは初めてのようで、私のために部屋を用意してくださっていたのです。私を歓迎してくれてるんだと本当に感動しました。ガーナ名も下さって、私はガーナでは「アクィア・ジャンフワ」という名前で生活をしました。夜ごはんはフフと呼ばれる現地の食べ物でした。日本のバナナとは違う、甘くないプランテンバナナというものと、キャッサバを杵と臼でついた、お餅のような食べ物です。赤いシチューをかけて、手で食べます。ガーナは辛いものが大好きなのでとても辛いのか思いきやそうでもなく、お肉にシチューが染みていて、フフもお餅みたいで日本の感覚で食べても美味しかったです。

孤児院には、ヨーロッパから来たほかのボランティアの方もいらっしゃいました（ドイツ 2 人、オランダ・イギリス・スコットランド 1 人ずつ)。彼らはそこに長い間滞在していて、自分にできることをしていました。隣接する学校で英語を教えている方、トイレやシャワーなどの水環境を整えた方、PC などの電子機器の設置を行った方、病気の子供の看病をして必要ならば病院に連れていく方。みんなに話を聞きました。お世話をしてくださる方に何ができるかを相談すると、学校の給食のお皿洗いをすればどうだと提案があり、喜んで引き受けました。次の日から孤児院の朝ごはんの食器６０枚、学校の給食（↓写真）後の食器１００枚を洗いました。具体的に活動してみると、色々頭の中で悩んでいた時よりも具体的に状況が把握できて、感じることも多いのだということに気付きました。

まず、そんな多くの食器を洗うというのに、使うのは、洗剤と、洗剤で洗うための桶一杯の水、それをゆすぐための桶一杯の水だけです。ガーナの食事は結構オイリーなので、洗っているとすぐに水面に赤い油が浮きます。そのうち水が黄色くなって、自分の手も見えないほど濁り、最終的にヘドロのようになります。それでも水を替えません。これには本当に危機感を感

じました。子供たちはトイレの水が止まった時は、一回用を足した後にバケツ一杯の水を流します。トイレにはバケツ一杯の水を流し、食器洗いではヘドロ状態になっても水を替えないというのは理解しがたかったです。しかしこれは日本人である私の感想であって、現地の人には現地の価値観があるということはわかっているつもりなので、そこに対して指摘はできませんでした。どこまで踏み込んでいいのか距離感がわからず、どこまで自分の意見を言っていいのかわかりませんでした。

また、ガーナの人はゴミをそこらへんに簡単に捨てます。そのせいで、水のパック（水は普通パック詰めされて安く売られています）が道のあちこちに落ちています。学校の中にも、至る所にゴミが落ちていました。それに気づいて掃き掃除を長い時間やっていましたが、これも皆の考え方が変わらなければキリがないと思い、ゴミ箱を買おうと思いました。他にも、学校の中にあるkinder garden（幼稚園→）に遊具が一つもなく、子供たちが椅子にずっと座って静かにしているだけだということにも気づきました。長い時間静かにしているのは辛いだろうと思ったので、買う物リストに玩具も追加しました。また子供たちの制服や私服に破れているものが多かったので、裁縫をやろうと思い、針と糸も追加しました。他にも、サンダル（履物が壊れている子も多い）・懐中電灯（しょっちゅう停電になる）・ペン（筆記用具がない子も多い）などなどを書いたリストを手に、次の日は大きな市場のある町に行き、それらを調達しました。私が大量の買い物袋を下げて孤児院に帰ると、子供たちが興味深そうに集まってきます。そこでゴミ箱の使い方などを教えましたが、残念ながら最後までゴミはゴミ箱に捨てるということは定着しませんでした。私が一番買ってきてよかったと感じたのは、針と糸でした。「破れている服があったら私のところに持ってきて」という英語をチュイ語に訳してもらってそれを覚え、

孤児院の子供たちに言って回りました。それは「ワーワターディ・アテーチー・ファブラナメンパン」という呪文で、ひとたび唱えると英語が理解できない小さな子供も沢山服を持ってきます。大人たちは、私がそんな言葉を話すのが面白いのか、私を見かけると「あれを言って！」と話しかけて来てくれました。孤児院でボランティアの外国人（私含む）のお世話をしている人は、携帯電話を私の口元に持ってきて、「あれを言って」と言うので、何かと思いながらその呪文のようなものを唱えたのですが、実はその時に携帯電話についているボイスレコーダーで私の呪文を録音していたらしく、今でも私の声の呪文を着信音として使ってくれているそうです。そんなわけで私は自分にできることを見つけました。朝から子供たちに敗れた服を持ってきてもらってちくちくと塗っているうちに１０時半過ぎになり、孤児院の朝食の食器を洗い始め、給食の準備ができるまで学校を掃き掃除し、給食の準備ができて授業も終わったら食器にそれをよそう手伝いをします。子供たちが全員食べ終えたら、その食器を洗います。それが終わるのが１５時半過ぎ。そこからまたずっと縫物です。途中でシャワーと夕飯とその食器洗いを挟んで、また裁縫を再開して手元が見えなくなったら終了して寝る。そんな生活を繰り返しました。勿論休日は学

校がないので、裁縫が片付くと子供たちと大縄などをして遊びました。

ガーナに来て気付いたことは沢山あります。ガーナはアフリカの中で最も平和な国です。日本と比べると断然、自然に基づいた原始的な生活に近い暮らしをしています。しょっちゅう停電が起きますが、人々は気にしません。そして、貧困に喘いで困っているわけではありません。物乞いはいますが、去年行ったフィリピン程ではありません。市場の活気は渋谷にも負けませんし、携帯電話やオーディオ設備などのＩＴもあります。確かに乗り物や道や建物を見ると汚かったりボロボロだったりしますが、それは私たちとは価値観や気をつける場所が違うからです。ガーナ人は綺麗好きです。一日２回シャワーを浴びますし、シャツや制服は毎朝アイロンがけしてぴっしりしていますし、なにかと掃除をしています（すぐにゴミを捨てますが)。

あと、宗教についてです。ガーナはキリスト教徒が多く、孤児院の横にも協会がありましたが、私の想像していた教会とは全く違っていました。十字架がないですし、キリストの像もないですし、ステンドグラスもありません（写真→)。人々は静かに指を組んでお祈りをするどころか、大きな拍手をしながら目を閉じて大声で何かを叫んだり、バンドとマイクが登場して歌って踊ってと、私の想像するお祈りとも全く異なっていました。しかし考え方はキリスト教であって、子供たちも小さいころからその教えを伝えられているため、挨拶のように「あなたは神様を信じてる？」と聞いてきます。答えに困って「Sometimes.」と答えると、「なんで？」としつこいくらいに聞いてきます。私がキリスト教でないことを伝えると、「じゃああなたの宗教では誰があなたやこの世界を作ったの？」と聞いてきます。子供たちも、立派なキリスト教徒なのです。私は日本で、宗教を身近に感じることが少なかったので、なかなか答えられず、自分が自分の宗教について知っていることの少なさに驚きました。

そして、私は自分が日本語というマイナー言語を母国語に持つ日本人で良かったと、帰って来て落ち着いてから気付きました。なぜなら、英語圏の人たちよりも、他のマイナー言語を話す人たちと仲良くなれるという強みがあるからです。英語圏の人は、どこに行っても大体母国語で会話ができます。でも私たちマイナー言語を話す国民は、他の国に行ったときに母国語でなど会話できません。そんなときにも英語ができれば問題ないのですが、(私は英語が苦手なため）現地語を覚えれば、周りは一気に興味を持ってくれます。私も、外国人がたどたどしくでも日本語を話してくれたら、嬉しいです。一生懸命覚えてくれてるんだなぁと微笑ましくなります。それと同じようにガーナの人たちも嬉しく感じてくれてるんだなぁと、呪文の事を考えたときに気付きました。英語圏の人には、現地のマイナー言語を覚えるというのは最後の手段なのだと思います。あまりにも英語ができない人が多い地域では、現地語を覚えざるを得ません。しかし私は、周りが英語を話せようと関係なく私自身が英語が苦手なので、頑張って現地語を覚えます。母国のマイナー言語を外国人が話すときの嬉しさは、同じマイナー言語を母国語

に持つ国民にしかわかりません。なので私は、（英語はもっと勉強しようと思っていますが、）これからも外国に行ったらその国の言葉を覚えられるように頑張ろうと決めました。

２度目の海外でガーナに行き、本当に世界が広がりました。ヨーロッパの人たちと話したことにより、ヨーロッパと日本の考え方の違いも知りました。もっともっと、いろんな世界が知りたいと思うようになりました。具体的に動けば、具体的に物が見えてくることにも気付きました。

今、私は３年生です。もうすぐ就職活動も始まります。私は今回沢山の人の影響を受け、沢山の事を教わり、それによって気付いた針路の選択肢が全て魅力的に見えて困っているところです。ゆくゆくは海外の現地で国際協力をして生きていきたいです。そのために、求められる人間にならなくてはなりません。そのために、専門分野の技術を身につけなければなりません。しかし、資格や技術は持っていて荷物になることはありません。なので、私は今やっと、どんな経験も無駄にはならないという言葉の意味が実感できたところです。これを忘れないように、残りの大学生活を有意義なものにしていきたいです。